昭和二十九年十二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
（通第六十九号）

慈光

第六卷　第十一號

目次

洞爺丸遭難の悲劇……花田正夫…(1)
池山先生「一心正念直来」の御訓読に就いて……榊原徳草…(7)
大經上巻全体の感じ……福島政雄…(10)
昭和二十九年を送る……聚墨生…(13)

洞爺丸遭難の悲劇

花田正夫

昭和廿九年も過ぎようとする歳末、英船タイタニック号事件に次ぐ、世界第二の海難と称せられる九月末の洞爺丸事件を憶ひ、哀悼、痛惜、おくあたはぬものがあります。台風十五号の狂乱のあと、千数百の生命を瞬時に奪ひ去つた函館港外の惨状を偲び、今は亡きみ霊の前に襟を正し形を改めてぬかづきまつるばかりであります。

噫、然し人の心のはかなさ、月日と共に段々とその生々しい感覚から遠ざかり始めて居りました十一月の初旬でありました。北海道美唄市、三菱美唄礦業所の近角真観氏から書信を頂き『美唄礦業所と友山芦別のバレーチーム一行計三十六名が洞爺丸で遭難、迂生も廿七日現地に急行、遺体收容並に遺族援護を指揮し、御蔭を以て完全收容は出來ましたが、無常迅速の姿を目のあたりに知らしめられ、改めて祖師聖人の御教の只事ならざる有難さに感動せしめられました。同封の拙文により、その惨状の片鱗をも御推察願上げます云々』とありました。

同封の「函館救援記」は次の通りでありました。これは近角真観氏が救援隊長として現場に急行せられ、その惨状のありのままを御留守宅に宛てられた書信で、読む人々の胸を強く打つものがあつて、同地の方が謄写して有縁の人々や、遭難者の御遺族に頒たれたものでありました。

○

去る二十七日深夜、遺族一行と共に函館到着、直ちに七重浜海員養成所に急行、ローソクの薄暗い焔をたよりに約六十の遺体を検分、凄絶、悽惨、胸に迫るものあり、覚えず合掌、涙と共に念佛を唱へた。

未だ殆んど納棺に至らず、荒むしろの上に変り果てた苦悶の姿を横たへ、いとけない子供は母親の胸にうち臥し、母はこれを抱く姿そのままに共に硬直し、夫らしき人が声も涙も無く、汚れた冷いむくろにまたがり、ただひたすらに全身をサスつてやつている……。

両親の亡き骸にとりすがつて号泣する男女学生風の一団、狂気の様に夫をゆさぶつてゐる奥さん、細い長いすすり泣き……。悲しみそのものを更に〳〵ゆすぶる様な許婚らしい美人のすすり泣き（この人は野天火葬場で発狂し、火焔の中に飛び込まうとした）

俺も大震災、空襲、戦病死、変災等々と随分悲惨な状景を見て來た心算だが、今度の様な酸鼻を極めた悲歎に胸えぐられたことは嘗てない。

鬼神も泣け、天地よ慟哭せよ、罪なき幼兒、母親、青年、老人に運命は何とむごたらしい災禍を与へしや。ヘルプレスチャイルド……子供が、赤兒が一番可愛さうだ。紅葉の様な両手を上げて、口を開いたあどけない姿、その口の中は黒血で一杯だ。きちんとセーラー服を着て眠つた姿そのままの女兒、みそつ歯をチラリと見せて、顔の泥を拭つてやればそのまま元気よく立ち上りさうな男の子、（園田君の令息がさうだつた、キャラメルを棺の中にまいた）

遺族ならねど、泣かぬ者は無い。

園田君が男の子と一諸に上つた時は、迂生はじめ、人事部長、所長も手を放つて号泣した。

次に可哀想なのは女だ。子供をくくりつけて居る母親が幾体もあがる。スカートはまくれ、頭の毛はズリ落ちて丸坊主となり、目玉は飛び出し……もう書き度くない!!! 男子と違つて衣服にポケットがないので身許不明者が多い様だ……その姿で皆の前に身を曝している。

佛の四十八願の中に

設ひ我佛を得たらんに、国中の人天、形色不同にして、好醜あらば正覚をとらじ（第四、無有好醜の願）

設い我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界に其れ女人ありて、我名字を聞きて、歓喜信楽し、菩提心をおこして女身を厭悪せん、いのち終りてのちまだ女像とならば正覚をとらじ（第三十五、変成男子の願）

とある意味が、今回はじめて、はつきり判つた様な気がする。

中野女医の遺体を確認した三日頃ともなれば、顔はふくれ上り、崩れて、男女全く同形となり（両者共に丸坊主である）中野夫人の場合も僅かに歯の特徴と、左眉のキズと左下口脇のホクロと、着衣のエリによつて確認出來た次第である。奇しくも、御夫婦同日に上つたので、慰霊堂に柩

を並べて、懇ろに通夜し、翌日同じカマで相ついでダビに付した。

あふれる涙を拭ひもせず、香水を振りかけ、遺体を拭浄してゐたお姉さんの姿が忘れられない。

その後の遺体は人間と云はんよりは腐臭を発する化物(バケモノ)とも云ふべき気の毒な有様、それでも発見した遺族は躍り上つて狂喜するのである。こんな可哀想なことが世の中に又とあるだらうか……。

遺族の悲願が届いたのか、昨六日は七体の遺骸を收容、総数二十二人中、残りは六体。うち今日一体発見、あと四体も今日中に收容する見透しがほぼつき、我々も大いに焦心を慰められてゐる。

ただ園田夫人だけは皆と離れて漂流を続けてゐるらしく何卒早く上れかしと、その父、子の遺骨を守りながらこの手紙を宿舎にただ一人残つて書いて居る。

池田君以下の係員並に遺族は全員今日も有川桟橋（遺体が無言の上陸をする所）、船員養成所（名前の解つた遺体安置場）、野天火葬場、慰霊堂（名前の解らぬ遺体安置場）と手わけして早朝から総出動。毎日午后六時から遅きは十二時、一時頃默々と帰つて來る姿は尊い。俺も午后から出掛けるのだ。

花束(ハナタバ)に、どんな姿でも驚かないから、どうか早く帰つて來て呉れと切なる気待を紙片に書き添へて人知れず海に流してゐる遺族の胸中を察すると、何としてでもこの願だけは叶へて呉れと神佛に祈らざるを得ないのである。

昭和廿九年十月七日　於函館港　近角眞観

涙に曇る眼をぬぐひ〳〵、悲しみに震ふ声も杜絶(トダ)え〳〵やつとこの救援記を読み終りました。

「いたましきかな、まのあたりことばをまじへし芝蘭(シラン)の友、いきとどまりぬれば遠くおくり。あはれなるかな、まさしくちぎりをむすびし断金のむつび、たましひさりぬればひとりかなしむ」の纒綿たる恨み、更に「憂念結縛、心意痛著、迭相顧恋、窮日卒歳、無有解已」の佛陀の悲化の実語は只事でないと身にしみて知らされました。

狂乱の大悲

この洞爺丸事件の遭難者の中に、池山先生のお孫、村上汐路さんが居られたのであります。汐路さんは池山先生の亡くなられた時小学校の五年生で、一週忌の時出来た追慕録の「呼子鳥」には次の一文を草してゐられます。

念佛と祖父

村上汐路

広き宇宙に唯一人の、天にも地にもかへがたい我が祖父は、昭和十三年十一月八日午後三時十九分眠るが如く大往生を遂げたのである。ありし日の面影を思ひうかべると、そぞろに涙がわいて來る。

かつて僕達孫三人が家に行くと、祖父は大へん喜んで「よくきたなあ」—といつて先づ念佛を称へられた。それから僕等と一諸に山を散歩し、花あはせ、トランプに打ち興じ、ワハマン（愛犬の名）と戯れ、カナリヤの相手になつてゐたありし日の姿があり〳〵と目前にうかぶ。

今年の夏休みに僕が葡萄の話をすると「自分で作つたものは特別にうまいと思はれるものだよ」と言つたので「それでもほんたうにおいしいよ」と言ふと「さうじや〳〵お念佛のやうだと」いつた。又種々の話をしてくれたが、その最後にはきつと一人で南無阿弥陀佛と念佛を唱へてゐた。

僕が甲南高等学校尋常科の試験に合格しようと思つて勉強してゐるのも、一つは入学して祖父に喜んでもらふためだつたのだが、それを待たずして死んだのは何より残念である。しかし合格したらせめて僕も念佛をとなへ、歎異抄を拜読して地下の祖父に喜んでもらひたひものである。なぜなら「ただ念佛」は祖父の生きた精神であり肉体であるといつも父から聞かされてゐるからである。

わが祖父はただ念佛して逝きにけり

この可愛い汐路さんが先生の十七回忌を前に、惨死せられてゐたのであります。なほ父君の村上鶴一氏から承れば昨初冬汐路さんのお母様は急逝せられてゐたのであります

打ち続く悲劇の嵐の中でお父さんの村上鶴一氏は、悲歎のドン底に沈んで居られたのでありました。

計らずもさうした村上家の惨状の中に池山先生の十七回忌記念の慈光誌と、一心正念直来、オネガヒダカラスグキテオクレヨの遺墨の色紙と、絶対他力と体験の遺著をおとどけ出來たのであります。そして狂はんばかりの村上氏の暗憺たる胸に大悲の灯が点ぜられたのであります。その悲喜交々の村上氏の書信は次の通りでありました。

○

一心正念直來の色紙、絶対他力と体験に加へて慈光誌多数相次いで御送附いただき、何と言つて御礼を申し上げてよいやら感謝の言葉も御座いません。

ここ二三日間、恰も義父の面前で打眺め、読み続け、相

語つてゐる心地で夢中に過して居ります。

汐路の遺難以來月余、此所に坐つたなり、遺影を眺めては物言はぬ愛兒の顔に頬ずりし、遺品を取り上げては、まだ兒が体臭でも殘存せるやと抱きしめ、嗅ぎ廻し、遺瀬なき涙を絞つたり……。

あした夕べには、浦の砂浜に立ちて、北方の波間に向ひ声を限りに、愛兒の名を呼び『帰れよ！父此所に在り』と叫び、狂人と言はれようが、愚人とのしられようが、愛兒の面影が髣髴として現はれざる限りは打ち寄す波のしぶきも知らず、声かれ、体力つきて、悄然と家路につくといふ幾日かを過して居る有様です。

千萬言の悔みの言葉も、慰めの辞も耳に入らず、如来の御慈悲など一片の空言に過ぎず、

「かへせよ愛兒を！来れよ汐坊よ！」

と狂乱の日々を過して参りました。

然るに『一心正念直来』の色紙を見た瞬間、どうしたのでせう、義父の声が致します。

『ナムアミダブツ。もつともだ！もつともだ！泣け！　泣け！　さうだよ。お前の云ふ通りだよ、ナムアミダブツ。

幸吉（先生の三男）が死んだ時、お父さんもその通りだつたよ。よくわかる、よくわかる』

とやさしく肩をたたかれた感じが致します。オネガヒダカラスグキテオクレヨがしみじみと心の奥につらぬき通じた感を受けました。

「一心正念直來」の一句は、幸吉が死んだ当時、幾十日も、幾十日も、人の求めるままに、或は時間のあるかぎり、父が書き通した御文でありました。

絶対他力と体験、この書の序文にある、近角常観先生と義父との念佛の再会をせしめたのは私の学生時代です。私の一番因縁の深い出來事なのです。從つて他の書の何れよりも私にとつては記念の書とでも申しませうか。これにつきましても種々の思ひ出話が沢山ありますが後日に譲りませう。この書が再版されましたことも、悲歎に沈む私のためへの父の再現として誠に喜ばしく存じます。

かくして更めて愛兒の遺影を眺めますと、自然に心和らぎ、ほの〴〵と朗らかな心持となり、兒と共に嬉し笑ひがこみあげて参りました。ありがたきかな　大悲の御親　とただ念佛させて頂く次第であります。

末筆まことに勝手な願でありますが、神戸での戦災で義父の日記、俳歌、感想文、ことに近角先生との幾十年間に渡る信仰上の書信、句佛上人に関する書簡等皆家財道具と共に焼失し、私の手許には写真一葉も残つてゐません。名実共に残してくれたのは『ただ念佛』あるばかりです。それにつきましても、若し独文歎異抄、意訳歎異抄、呼子鳥、佛と人、いづれでも御手に入る機会がありましたら御送り願ひます。義父を偲ぶよすがの何一つとして無い私の願ひを満たして下さいますやうに。

昭和廿九年　十月末日　　広島県鞆町大字後地

村上鶴一

村上氏の告白文を拝読し、全身全霊を挙げて慟哭せられるところ、最早そこには地上の同情とか悔みとか、限りある何ものをも以つてしてもどうすることも出來ぬ、狂か、愚か、痴か、そこにこそ、佛陀の全生命を注ぎこまれての大悲のみが透徹する。平素何けなく読み聞き覚えた佛語が、光を放ち音をたてて天地全体にみなぎつて悲魂の全体をおさめとつて下さるのであります。これ佛陀の悲心常に狂乱してやまざるが故であります。

心ある読者の方は、村上氏のこの一文をとほして、佛陀の悲心に救済せられた、韋提希夫人をすでに思ひ浮べられたことでありませう。『世に珍しい仁君、ビンバシャラ王を夫に持ち、何一つ不足のない生活から、父王を幽閉し、自ら王位に即かうとした生みの子の阿闍世のために、自分まで王宮深く押しこめの身となり、歓楽の天辺から哀傷のどん底につき落されて、つく〴〵と火宅無常のはかなさを思ひ知つて、身も世もあらぬ悲しさに、悲泣雨涙、一心に救を求めた』すると、そのさけた頭の上らぬさきにすでに佛陀は夫人の前に現れ給うて「阿彌陀佛、ここを去ること遠からじ」と仰せられつつ、種々安慰せられる大悲の至極に、遂に廓然とした気分になり『今の今まで胸一杯にとじてゐた煩悶は雲と散り霧と消えた。そしてこれまでついぞ覚えたことのないたのもしさ、よろこばしさが身に泌みての佛陀の大悲が心の奥底まで徹到した』のであります。

この韋提希夫人の上に顕現した救済の事実が、佛陀の大願業力に催されて、随時、随所に再現せられ、はたまた尽未来際かけて継承せられて行くのであります。

本稿を擱筆するにあたり、地上無二の信契、近角、池山、両師の血縁の方々、眞観氏、鶴一氏、汐路さんの、この大惨事につながりを持たれ、而も期せずして同一念佛裡に帰入せられてゐることの不思議さに驚嘆させられますと共に、この大悲劇の上に、すでに〳〵如来大慈大悲の救ひの御手のさしのべられてあり、人々の一刻も早く寸時も速にその大悲の御手に帰られることを、佛陀は哀々切々として待ちに待たれてゐるのを仰ぐ次第であります。

池山先生の「一心正念直來」の御訓讀の思ひ出

榊原德草

いつのことだつたか思ひ出せないが、それは多分京都の顯道会館での御講話であつた。御講題も何であつたか、それもすつかり忘れてしまつてほんやりしてゐる。ただその時の御話の他の部分は一切覚えがなくなつてゐるけれども『一心正念直來』の先生独自の御訓読の光景は眼底に焼きつけられて一生忘れられないのである。

思い出はあれこれと前後交錯して了ふが、先生は歎異鈔第二章の、先生の言葉を借りて云へば

『私の話にはいつもでてくる、例の歎異鈔第二章の「親鸞におきては、ただ念佛して云々とある、あの「親鸞」とあるのを「池山」とおきかへ「よき人」とあるのを「親鸞聖人」とおきかへて「池山におきては、ただ念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人親鸞聖人の仰せを蒙つて信ずる外に別の子細なきなり」と読みかへた刹那、丁度光の滝を浴びたやうに、今迄唱へにくかつた念佛が、止めどなく溢れ出るのであつた……』

の、例の先生の廻心のお話があるときには、大低その次に、二河白道の、無人空曠の沢から始つて東岸に立つ旅人が、西岸上の彌陀招喚の声「汝、一心正念にして直に来れ云々」に呼びさまされて初一歩を白道に踏み入れる経験を御自身の身証として、切々たる如來の願心を説かれるのが常であつた。

だから先生は、またある時は

『ただ念佛。お念佛も南無阿彌陀佛の六字であるし。一心正念直來も丁度六字であるから……』などと云はれ、六字の名号と一心正念直来とは同様に味読してゐられたのであつた。

先生の晩年の最初の重患の時。御病気の全快祝ひを縁として有縁の者—（我々もその仲間に入れて頂いた一人であつたが）に「一心正念直來」の御直筆を軸物にまで表装

して、一人々々に送つて下さつたことがあつた。私がこの御礼に参つた時、先生は

『お名号だといつも懸けておくのも変なものだが、あの一心正念直來は、常々かけておいても、誰も変だと思ひもせず、然しその実、南無阿彌陀佛そのままなんだからね』

と言はれて、温容をほころばせ、私の意のある所はこれなんだと、言外の意をあらはされて、ニコニコされたことを憶えてゐる。

くどくどと長い前置を書いたのも「一心正念直來」が御名号、如來のおよび声であり、二つは一つの如來大悲の御心になつて了つてゐる先生の御身証が、今にして思ひ浮ぶからである。あの時のこと「オネガヒダカラ　スグキテオクレヨ」と訓読されたお姿を髣髴として現に眼前に拜するからである。それをここに映し出したいからである。

先生は御講話の進むにつれていよいよいつものやうに聽衆の心をつかみきつてしまはれる。一言一句がひしひしと身に感じ心に滲みとほつてくる。説者と聽者は一つになつて、私共聽者は、ものに憑かれたやうに恍惚として聽き入る状態にあつたときである。どんなお話から出て來たのだつたか覚えてゐないが、御先生は後方の黒板に何時ものやうに手早くスラスラと「一心正念直來」と書かれた。

そして「一心正念直来とは…」と言はれて「直來とは」と後へ向きかへられて、黒板にさきほど書かれた下の方、「直來」の右側に「スグキテオクレヨ」と片仮名で和訓され、我々の方に向きかへられて「直來とは、スグキテオクレヨとの如來の御よび声であり、これは誰でもかう読むのが妥当でありませう」—あなた方もこれに同意されるだらう、これは当然の訳読なのだから——といつたお顔つきをせられる。

次に後方（クウヒ）をむかれて「一心正念」を見直（みナホ）され、前に向きなほられて、謹厳な面持ちになられると「一心正念、これを思ひきつて、深く如來の御心を仰ぎ、大悲の御旨を拜するならば！」と後にむきかえられ手早く「オネガヒダカラ」と書き終られた。

そしてもとの姿にかへられて、暫く後方、黒板の字を眺められる。さうして語をつがれて「オネガヒダカラと訓読してもさして当を失したものではあるまいと思はれる」と言ひ切られると、一段と緊張の度を加へられて、上体を曲げ、我等聽衆に頭を下げられる御容子をされながら「だから、一心正念直来とは、オネガヒダカラ　スグキテオクレヨとの悲心やむことなき如來の御心そのものと、私は解してさしつかへのないものと思ふのです」と言ひ放たれたのであつた。

私のその時の実感をいふと、オネガヒダカラと一心正念の右側に素早く書かれた時、茫然自失の底に涙がこみ上げてきた。ただ有難さにおのづから念佛が唱へられてくるのであつた。

それは、先生は、一心正念を、何と訳されるだらうと、一生懸命にその訳読が、あゝでもあらうか、かうでもあらうか、と探り求めて得られず、それなら私はどう訳するのかと考へ、あゝでもない、かうでもない、と一心正念の四文字に、前後左右に引きづり廻されて五里霧中、どうとも訳読の出來ない最中に、突如思ひもかけない訳である。一心正念の逐語訳でもない、意訳でもない、それとは全く中心点を別にした、しかも的は正しく射ぬかれた如來大悲そのものの願心願意が先生のチョークの先から間髪をいれず流れ出たのである。私そのものは引き廻された挙句にうづくまつたのである。そこへ「スグキテオクレヨ」と喚んでも腰の上らない私めがけて、大悲心そのものの現れとして、頭を下げ、両手をついて、重ねてたたみつけて「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」と、手をとり脊を撫でて「サア、オネガヒダカラ、オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」と綿々切々の懇請を傾けられたと感ぜられたのであつた。私の涙の中のお念佛は、さうした現れ、さうしたお念佛であつたのである。

一心正念を「オネガヒダカラ」と身証実語された先生のあの御姿、あの御声。直来を先に訳された先生のあの御姿あの御声、直來と先に訳されて、元にもどつて第一句、一心正念を、オネガヒダカラと如來の悲心そのものの中に読みとられて私の前に現れ給うた先生なのである。

何時かは「一心」を「た」であり「正念」は「だ」である、そして『直來』は「念佛」である、だから「一心正念直来と」とは「ただ念佛」である、と仰言つた先生。

岡山の信者の方々の前で「直来はただちにきたる」と読んでもまんざら的をそれてはゐまいね、と語られたことのある先生。

あの歎異鈔二章、先生の常の仰せ「親鸞におきては、ただ念佛して云々」は終始一貫して先生につき纏うて離れない、如來の矜哀であり、且又それは、念佛を受け取られた先生の実語であり、とりもなほさず、如來の実語、直説であつたのだと、私には今なほいよ〳〵実感されてくるのである。

昭和二十九年十一月、先師十七回忌記念の日、謹録　　德　草

大經上卷全体の感じ

福島政雄

前回に多少細かに申し上げました淨土の荘厳につきましての私の感じを述べませう。

さて先づ、佛の淨土は西方十万億佛土を超えた彼方に建立されて、十劫を経たまうてゐるといふことであります。これについての味ひを申しませう。

たとへば私共が今富士山に登らうとして地図を拡げますと、御殿場の登り口があり、大宮、須走、それから吉田口からも登れるとわかります。然しそれをしらべて居る間は登る道の知識を頭で探してゐるだけであります。それがいよ〳〵登ろうとなりますと、登り口がいくらあつても、その一筋とならねばなりません。たとへば御殿場口なら御殿場で、そこ一つから登る外ありません。

佛のお淨土も恢廓広大で、ひろびろとした広大な世界であるといふだけでは、富士山への登り口を示されたやうであります。それをいよ〳〵味はじて頂く道は、西方十万億佛土を超えた彼方に淨土は建立されてゐて、成佛以来すでに十劫と云はれてゐる、かう云ふ風に教へられると、恢廓広大な淨土の山の登り口がひらけ、これからお淨土に入らして頂く口がひらけるのであります。

かう云ふことなしに広大無辺と云ふことを、ただ漠然と考へてゐるばかりでは、登り口が実際にひらかれません。富士に登るのにも「御殿場口はこゝだ、こゝからまつ直ぐに登れ」と教へられて「ハイ」と云つて、そこから登ると富士の頂に登れるので、それと同じ味と思ひます。

「佛のお淨土は西方十万億土を超えた処です」「ハイ」「佛は成佛せられてすでに十劫であります」「さうでありますか」と云ふ風にすなほにうけて頂くところに淨土の門がひらかれます。さうでないとお淨土は考へてゐるだけ

に終るので「西方十万」「十劫正覚」といふことを示されて始めてお淨土の味が出て來るのであります。

次に淨土の世界の美しさがこまかに述べられてありますが、これも皆佛のまことから出たのですから、金銀、珊瑚、宝樹、宝池にみな佛のいのちが通うてゐるのであります。

さうでありますから、七宝で飾られた七重の行樹とか、宝の池の黄金の砂、そこに八功德水を湛えてゐると聞いて、その七つの宝、金、銀、珊瑚などに目をつけるのでなく、さう説いて下さる佛のまことに、その言葉を縁として目ざめさせられて行くところに、佛のまことが、身近に触れてまゐるのであります。

淨土の音楽につきましても、その音楽は何とも云へぬしづかな音楽でありまして、私共の煩悩の心を限りなくしづめる音楽であります。そこにお淨土の味を知らして下さるのであります。

さてお淨土とは私共がそこに生れさして頂いて、ただ踊り上つてよろこぶだけのところでもなく、よい気持になつて坐つてたのしむだけのところでもなく、そこでは佛のまことを眞正面から無理なく頂くことが出來るのでありまして、そのやうに佛のまことを私共のために開き示されてゐると思ひます。

もとより淨土の荘厳について一つ一つの味ひもありますけれども、全体としては、佛のまことの姿そのものを開いて、眼に見えるやうに、耳に聞えるやうに触れさして下さる。感覚に触れる、目、耳、舌、肌にふれて味ふ、さう云ふ世界を開き示されてあります。

然し金銀、珊瑚などの七宝は、現世では執着の対象でありますが、お淨土のそれは、むしろ執着を払ひのける、つまり金銀珊瑚でひきつけて、さて金銀珊瑚は何処にあるかといふ風な、実によい御方便をめぐらして下さるのであります。

親鸞聖人が曇鸞大師のお言葉を引用されまして『佛の淨土は七宝で飾られ、八功德水を湛え、美しい音楽が聞える、非常に楽しいところである。さういふ楽しい処に生れたいと、そこを願ふものは眞実の淨土には行かれぬ』といふことを教行信証に二ケ所も述べられてあります。

お淨土において、佛のまことをヂカに頂く、佛のまことが眼に見え、耳に聞え、手に触れる世界としてひらかれながら、その執着から抜けるやうに私共を導いて下さる、そこに佛のまことのたくみな御方便があります。

お淨土に生れると「自然虚無の身、無極の体」を得ると説いてあります。自然でありますから、無理がない、あるかと見ると無い、限りがあるかといへばそれもない、さういふところは頭では解りませんが、執着を離れた無碍自在で境界をひらく、執着を離れて無碍自在のいのちを与へて下さる、さういふ風なところを、自然、虚無、無極の体とかう表はしてゐるのでせう。執着はしないが、まことに美しい花も咲き、青色青光、黄色黄光、白色白光と美しい世界がひらきあらはれてゐる、それは感覚について現れながらも感覚を離れてゐる。佛のまことによつてひらかれることによつて、この世の執着を払う私共が、佛のまことが徹ることによつて、やはらげ、とかされて行くことになる。佛のひかりの照り返しが私共に及んでくる、光が私共を照し貫き通じて下さると味はしてもらつてをります。お淨土の感じは大体これで終ります。

むすび

大経の上巻、は佛のまことといふものを種々の方面から私共に感ずるやうに開きあらはして下さる。私などは大経を拝読いたしましても、上巻はとりつけませんでした。何のことを言つてあるのか、一向にとりつけませんでしたが、五十三歳の秋の頃から、すこしひらけ始め、佛のまことの、どうやら肝腎のことは身にひびくやうになりました斯の様に上の巻が私の心にしみとほつて参ります。

暗い煩悩の私の中に、暗さの中にとほる光を感ずる、それは上巻を段々味はされて、佛のまことを我が身の上にしみじみと頂き、暗い中にあけぼのの光を見させて頂くやうに、私の生活の五十三歳以後の身に、さうした味がひらけ始めたやうに思ふのであります。

以上が大経上巻を通読いたしましてうけます全体の感じであり、味ひであります。

終り

高士と微笑

最近の山田宰氏からの伯林通信によると「歎異抄の話を有志者の希望によつて続けてゐるが、弟子一人もたずとか念佛よりほかに往生の道を知らぬといふ聖人の持たれた謙虚さに聴者が驚いてゐる」といふことであつた。

それについて即時にニイチエの『超人』にある高士篇を想ひ浮べた。足取りも重々しく胸を張つて眞理といふ獲物をぶら下げた狩人達が山から下りて来る。然し彼の着物は到る所がほころび、手足は傷跡が生々しい。彼は雄々しくたくましいけれども、惜しむらくはバラの花の様な天使の微笑がない。若し彼等が自らの強さを誇る心が如何にも鼻持ちならぬことであると自覚し、そのことにウンザリする時こそ大切であるのに、といふ意味である。

昭和二十九年を送る

聚墨生

恢復といふことの難しい心臓筋肉障害の病気で、蓬戸不出の四年半の生活を過しました私には、一年、一年を送り迎へることが大変なことと感ずるやうになりました。そこに私の外面的生活の領域はいやが應でも段々に縮めなければなりません。僅かに筆墨をたよつて皆様の心の扉を叩き、或は書信の往復に心躍らせてはそこに無限の警策を蒙つて無上のよろこびにかへて居ります。

手にむすぶ　水にやどれる　月影の
あるか　なきかに　世をわたるかな。

の古歌も身に泌んで感じます。そしてこのあるか、なきかに世をすごす、文字通り手に結ぶ水溜り同様の僅かのいのちの水に、なほお宿り下さる大悲の月影をひたぶるに謝しまつることであります。

○

本年秋でありました。福島先生の御講話下さる日が恰度舊九月十三日夜、後の月でありましたので、先生から李白の詩を知らせて頂き、若し月が澄んでゐたら皆と一緒に月を眺めませうと結ばれた書信を頂きました。その詩は

青天有月來幾時　青天月あり、來ること幾時ぞ
我今停盃一問之　我今盃を停めて、ひとたびこれを問ふ
人攀明月不可得　人よぢのぼれども明月得べからず
月行却与人相隨　月行すれば却つて人と相ひ隨ふ

といふ詩文でありました。

○

野に山にうかれうかれて帰るさを
ねやまで送る秋の夜の月

蓮月尼

○

秋もすぎ、歳末も迫れば、中天に澄む月光の皎々たるをいよ〳〵感じるにつけ、更に教へられることがあります。

それは、夜道も月明りさへあれば、遠しろく道が照し出され、行人に提灯も電燈も不用となる如く、信心の人の存在するところに、自然にあたりの闇が破られて行く尊さであります。

もとより信心の人と申しても別人でなく煩悩具足の凡夫であり、地獄一定の光なき身でありますが、恰も、微塵の光明のない月が、唯一無二の太陽の光照を蒙つて、その照り返しとして地上の夜空に輝き、夜道を照し出す如くに、永却の生死の暗黒海裡に、流転沒沒を定めとする身なれども、その罪業の光なき身に、彌陀廻向の慈光を被り、称名報恩の声のひびくところ、その有縁の人々を通じて光は十方に満ち満ちて行くのであります。

斯くて、われ、ひと、共に大暗黒裡に終始し、ほとりなき生死の海を漂ふべき身に、われならぬ、みめぐみの力をうけて、われ、ひと、共に光の海に浮び上げられるのであります。

○小慈、小悲もなき身にて　有情利益は思ふまじ
如来の願船いまさずば　苦海をいかでか渡るべき

○無慚無愧のこの身にて　まことの心はなけれども
彌陀廻向の御名なれば　功德は十分にみちたまふ

佛の威神力の不可思議によつて、人間の持つ相対的小慈小悲をもつてしては成し遂げられぬ不可能事が『然れば念佛申すのみぞ、末通りたる大慈悲心にて候』とひらけて来るのであり、これはひとへに佛智の不思議によるのであります、われらがばからひではありませぬ。

ここに廢疾難治者が、唯一絶対の淨土返照の月明りを仰ぎその光益ひとつに、よろこびと、いのちをたまはつて、昭和二十九年を送らせて頂くのであります。

○

それにつけましても、敗戰すでに満十年、今なほ混迷と惑乱とを内に外に繰り返しては居りますけれど、聖德太子の憲章は照々として天に刻まれ、三経の義疏は大切に出版せられ、祖聖親鸞の慈語はひろく都鄙にひろがる日本であります。

そこに私如きがなほ不滅の光明を仰ぎ、無碍の光益に障り多きを苦にせず一日惠まれては一日の仕事を見出しつつ悲観もせず、絶望もせず、働かせて頂けますにつけても『世の中安穏なれ佛法ひろまれ』とひそかに、念ぜずには居られない次第であります。

○

彌陀の本願信ずべし　本願信ずるひとはみな
攝取不捨の利益にて　無上覚をばさとるなり

正像末冠頭和讃、　康元二歳二月九日夜夢告

編集後記

十一月三日、京洛淨住寺に池山先生十七回忌をいとなみ、京阪神在住の知友二十余人、恩師の慈懐裡に秋晴れの一日を過す。吉野から先生の御好きだつたレコード数枚を携行せられた北岡行男氏が、先生の一言で氏の父上が念佛の人と転ぜられた御述懐から始つて、次に一人一人の思ひ出を深い涙のこもる感激の中に談合、信の人の不死の光をまざまざと感得いたしました。これからは一道会と名づけて、十一月三日（文化の日）に年々淨住寺に会し、師恩に温められんことを約しました。

○

とも角もあなた任せの年の暮　一茶
故郷や臍の尾に泣く年の暮　芭蕉
歳末ともなれば何かと感慨の深いのは古も今も変らぬやうであります。茫々匆々と過ぎ去つて行く世にあつて、久遠のまこと、無辺のいのちにあふよろこび、申すもおろかであります。ほんたうに有難い年でありました。

△洞爺丸の悲劇は、余りにも悲惨で読むにも堪えぬものがありますが、その大惨事の上にすでに佛陀救済の大悲が縦横に活躍せられてゐることに喫驚、ことに村上氏の上にその如実の顯現を仰ぎ、そのままを録して皆様の膝下にお送りいたします。

△「一心正念直來」の訓読、は榊原德草氏が瞭々と記憶して居られたのに驚き、且つは池山先生の御心持を汲んで頂く上に何よりのものとして御無理を願つて原稿を頂きました。京都市右京区山田開町、淨住寺の御住職で、高槻医大事務長をして居られます。白井成允先生も淨住寺に仮寓して居られます。

△大経上巻全体の感じはこれで了し、來春から、下巻の願成就文について福島先生の御講話を頂きます。今度からはテープレコードを早瀬金之助氏にお借り出來ましたので、先生の肉声そのままを御照会出來ますことは何より喜びに堪えません。先生の新居は東京都北多摩郡神代町下仙川（センカワ）七九四（ジンダイ）であります。

三界に家なき身なりみ佛を
たのみまつりて移り住み行く

福島先生詠

慈光　第六巻第十二号　昭和二十九年十二月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

日曜講話案内
毎月　第一、第二、第三日曜
午后一時半
於、一道会館

昭和二十九年十二月十日印刷
昭和二十九年十二月十五日発行
毎月一回十五日発行
一部　十七円（郵税共）
定価　半年　百円（郵税共）
一年分　二百円（郵税共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　奥川正生
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千種印刷所

名古屋市南区駅上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番